

ルポルタージュ

広島からのメッセージ、どう語られているのか

—戦争記憶と歴史認識の差異に向き合う—

早稲田大学政治経済学部政治学科

映像ジャーナリズム専攻

高橋恭子ゼミ 12 期

沈意境

概要：

本稿は広島から発信されるメッセージを記述し、戦争記憶の在り方を考察するルポルタージュである。

日本の平和拠点と言われている広島。元安川の両側を跨る平和記念公園は被爆者たちの話を語り続けている。毎年 8 月 6 日平和記念式典が開催され、市民や世界各国の代表が参列して、平和を祈る。

しかしながら、広島への原爆投下をめぐる歴史認識は国ごとに大きな差異が見られている。広島は世界で初めて被爆された都市として、日本では「平和学習」の拠点とされている。一方、アメリカでは、「原爆投下によって戦争を終えることができた」という神話が長く続いてきた。そして、日中戦争で甚大な被害を受けた中国では、原爆は「日本に対する報いと懲罰」と認識されている場合が多い。

「広島からのメッセージ、どう語られているのか」という問いを持ちながら、広島に足を運んで、様々な人に取材した。「戦争記憶の風化」、「歴史認識の齟齬」、「ヒロシマの可能性」という 3 つのテーマに沿って、取材した方の生の声を基に、広島で平和活動を進めてきた人々はどのように原爆投下の歴史と平和への思いを伝えたかをまとめた。

序章では、本稿執筆にあたっての背景や取材の概要、全体の構成をまとめる。第 1 章では日中米三カ国の教科書とメディア報道を通して、三カ国における広島への原爆投下の一般認識を比較する。第 2 章では、若い世代において、戦争の歴史に関する知識が乏しい原因と、その課題に取り組む各世代の方の活動を紹介する。第 3 章では、日米間の齟齬と和解から被爆者が歴史認識に向ける姿勢を説明して、日本軍による加害の歴史に向き合う活動家と記者の思いを伝える。第 4 章では、被爆地ヒロシマの記憶と経験がどのように活用されて、日本全国と世界中に発信されているかを模索する。そして、戦争を無くすために、平和のために、広島の人はどういう行動が取られているか、ヒロシマの可能性を考えていく。第 5 章は、取材を終え、広島の人から学んだことをまとめる。最後にこれから自分が戦争記憶や歴史認識に向ける姿勢を見つめて、本稿は完結する。

今回、十数名への取材から、戦争記憶と負の歴史遺産への関わり方を考え直すことができた。「ヒロシマ」からいただいた刺激・疑問・啓発を込めて、これからも世界中の紛争を見つめていきたい。